

〈書評論文〉

「存在論的転回」考

Martin Holbraad and Morten Axel Pedersen,
The Ontological Turn: Anthropological Exposition
 (Cambridge University Press, 2017)

鈴木 越 生

1 はじめに

近年の人文科学・社会科学では「存在論的転回」として、存在の物質性やとらえ方を掘り下げて考えることで、既存の知の前提を問いなおす挑戦が耳目を集めてきた。だが存在論的転回（以下、基本的に「転回」と略記）とは多様な思潮のゆるやかな総称であるため、その意義と射程を正確にはかるには、特定の知の歴史をふまえた文脈化された検討が欠かせない。

こうした検討を明快に提示している点こそ、本書の強味である。まさしく「存在論的転回」と題された本書では、2人の人類学者が、自分たちの考える「転回」の姿を鮮明に描き出すことに成功している。本書の「転回」は、既存の人類学からの乖離ではなくその延長線上に立ち、人類学的挑戦の深化を目指すものである。ここで人類学的挑戦とは、フィールドの現実を前にして自前の概念や思考を繰り返し問いなおし、変化させていく再帰的实践を指す。

共著者のマーティン・ホルブラードとモーテン・アクセル・ピーダーセンは、人類学における静かな革命として「転回」を位置づけた論集 *Thinking Through Things* に寄稿し（2007年、ホルブラードは共編者の一人）、アメリカ人類学会で「転回」にかんするパネルを主催する（2012年）など、人類学の「転回」運動を積極的に推し進めてきた。

以下まず2節では、本書の内容を評者なりに再構成する。本書は序論と結論に加え、6つの章からなる。まず序論で著者たちの考える「転回」の重要な特徴が示されたうえで、

1章ではこの「転回」の方向性が他の存在論的な諸思潮から峻別され限定される。2～4章では彼らの「転回」像の源流として、それぞれロイ・ワグナー、マリリン・ストラザーン、エドゥアルド・ヴィヴェイロス・デ・カストロらの研究が論じられる。かわって5章と6章は、以上で示された「転回」の発想を著者ら自身の研究を事例として試し、その切れ味を実験的に探る議論となっている。本評論は序論と1章、5章と6章に的を絞り、2～4章については個々の論者について深く検討する紙幅はないため、著者らの議論における位置づけを示すにとどめる。

つづく3節では、本書とは異なる「転回」観を取り上げ、本書の議論に欠けている争点を補足する。「転回」に対しては、本書が想定するのとはまったく別の側面から、重要な異議が突きつけられている。この異議は、人類学知を生産する場で維持されつづけている制度的な閉鎖性という、著者らが提示するのとは異なる人類学知の連続性を指摘するものである。本評論ではこの異議を受け、さらにこの争点を人類学の自己批判の歴史と関連づけながら、「転回」において人類学知のなにが変わり、なにが変わらないのかを問う。

2 内容の再構成

2-1 中核的アイディア

フィールドの現実を前にして、自身が当然視してきた前提が挑戦を受け、あらたな世界認識に至る。未知・他世界との遭遇から既知・自世界が相対化されていくというこの物語は、人類学を特徴づける定番の語りである。だが実際のところ、この自世界の問い直しの運動には大抵どこかでストッパーがかかり、どこかで手持ちの概念を借りて他世界を記述してしまう。このストッパーを取り外し、自世界の問い直しを極限まで推し進めてあらたな概念を生み出していくことが、本書が提示する「転回」の中核的アイディアである(1-9)⁽¹⁾。

このアイディアの含意を具体的につかむには、語義矛盾の例がわかりやすい(18)。たとえば「還ってくる過去」「魂をもった物」といった概念は、他世界の異なる時間観や物質観を記述するべくひねり出され、人類学の語彙として定着してきた。だが通常の意味では、「還ってくる過去」は過去でなく、「魂をもった物」は物ではない。過去・物という自前の概念を変えないまま他世界の事象の記述を試みているために、語義矛盾が生じているのである。

「転回」は、この段階から一歩先へと踏み出す。フィールドの的確な記述に必要なのは

⁽¹⁾ 本書の参照については文献情報を省略し、ページ数のみ表記する。

自前の概念を無理に合成することではなく、むしろ過去・物といった概念自体を問いに付し、つくりなおすことではないか。過去とは、物とは一体なにか。「存在論的」転回という呼び名が適当なのは、それがこうした根元的な「なに」の問いにまで至る点においてである。ここで「存在論」とは、なんらかの究極性によって存在を基礎づける議論とは逆に、存在のとらえ方を再帰的な反省へと開きつづける方法論的立場を指している(11)。

著者らは再帰性 (reflexivity)、概念化 (conceptualization)、実験 (experimentation) の3点によって、この方法論を特徴づける(9-24)。フィールドの現実を前に自前の知を反省的に問い返し(再帰性)、記述のために概念をつくり直し/生み出し(概念化)、あらたな現実のとらえ方や考え方を試す(実験)。著者らの「転回」とは、このようにフィールドに依拠して概念をつくり変えていく記述の方法論なのである。

この「転回」像は他の4つの「転回」、すなわち哲学と「オブジェクト指向存在論」、科学と技術の研究(STS)、別様の存在論、深い存在論と対比されることで、より鮮明に縁どられる(33-65)。第1の哲学的潮流は基本的に、世界の構成を明らかにしあらたな存在論を確立すること自体を目的とするため、記述の方法論のために存在論を動員する著者らとは問題意識が異なる。第2のSTSは方法論的再帰性を重視する点でより本書の「転回」に近いが、最終的には「方法論的議論が存在論的議論のためになされる」(43)という、本書の「転回」とは逆向きの性向を秘めているとされる。著者らはこの性向のあらわれを、方法論的介入から形而上学的なモデル構築の問題へと横滑りしていく、近年のブリュノ・ラトゥールの姿に見出す(43-4)。

残りの2つは人類学内部での「転回」の方向性を整理したものであり、本書の位置づけを明確にするうえでより重要度が高い。まず著者らが別様の存在論(alternative ontology)と呼ぶのは、フィールドで出会う異なる存在論を、既存の(西洋的な諸前提にもとづく)支配的な存在論に対する別様の可能性として提示する議論である。著者らはこの流れに、ティム・インゴルド、エドゥアルド・コーン、マリソル・デ・ラ・カデナ等、多様な人類学者を位置づける。かれらの議論は、なんらかの特定の存在論の重要性を訴える点で共通性があるという。対して本書の「転回」は上述のように記述の方法論であり、特定の存在論を重視するものではない(59)。

もうひとつの潮流において、存在論の言語は、現象の背後にある諸原則を明確化する方法として用いられる。著者らがこれを深い存在論(deep ontology)と呼ぶのは、それが存在の深度を想定し、事象の背後にある(とされる)より深い次元の諸原則を探究するためである。こうした特徴づけから想起されるように、この潮流は構造主義人類学の影響下に

あり、マイケル・スコットやフィリップ・デスコラといった論者が挙げられる⁽²⁾。著者らはフィールドの現実を一義的に定めずその偶発性に開かれた姿勢をとくにスコットに見出すものの、この潮流が「存在論に限らず社会、実践、宇宙論その他人類学的な反省と議論の根幹にかんする特定の考え方を自らの前提に組み込んでいる」(61) ために、概念的実験の可能性にどこかで限界を設けてしまうのではないかと問う。たとえばスコットが存在論的な階層性を議論の前提とするとき、その前提自体がすでに研究対象の特定のとらえ方であるにもかかわらず、再帰的反省はその前提自体を問いなおすに至らない(60)。

以上のように著者らは一貫して、再帰的な概念化実験の徹底度によって自らと他の「転回」を峻別する。こうして切り出された著者らの「転回」像はさらに、ワグナー、ストラザーン、ヴィヴェイロス・デ・カストロ（以下 VdC と略記）らの議論を介して彫琢されていく(69-198)。3者は VdC を除いて「転回」運動に直接かかわってはならず、とくにストラザーンは一歩距離を置いているが、VdC はストラザーンの関係論に感化され、ストラザーンは同じメラネシア研究者としてワグナーの研究に学んできたという影響関係にある。3者が本書の「転回」に結びつけられるのは、かれらがフィールドの現実を前に既存の概念を鍛えなおしてきただけでなく、そうして得たあらたな思考をてこに、人類学の基礎的な方法論や実践の意味づけをも変えてきた点においてである。文化の概念をつくり変え文化の名のもとで人類学者がおこなってきた実践をとらえなおしたワグナー、フィールドから着想を得た関係の概念を軸に独自の比較方法論・知識論を立ち上げたストラザーン、自然／文化の二分法の問いなおしから人類学における差異のとらえ方への挑戦に至った VdC、こうした3者の姿は著者らにとって、まさに本書の「転回」を体現するものなのである。

2-2 フィールドから立ち上がる概念

5章では物質性論が展開される。著者らは社会理論における物質性研究を人間主義と非人間主義という2つのアプローチに大別し、これらを批判的に検討したうえで、自らの物質性論を打ち出していく。

人間主義は人間／物の二分法を維持したまま、人間だけでなく物にも分析対象としての地位を与える。しかしこのアプローチにおいて、物は人間性の理解に寄与する限りで重視されるにすぎず、人間基準の考え方に変わりはない(203)。対してアクター・ネットワーク理論を代表格とする非人間主義では、人間／物の二分法自体が問いなおされる。ここで

⁽²⁾ 深い存在論という呼称も、レヴィ＝ストロースの「深い構造」概念に由来する(55)。

行為主体性は人間の意図の遂行ではなく、「人間」も「物」も含めた諸関係が互いに差異化されてあらわれるネットワークの創発特性とされる。このアプローチはたしかに人間基準の考え方を根本的に組み変えるが、日常的な物質性の感覚からあまりに遠ざかってしまう。すると、いわば物の「物らしい」特性そのものを対象化するという、物質性研究の初発の問題意識が見失われていく(207)。

以上2つのアプローチに対して、著者らは物質性への注目を徹底させ、物質自体からいかなる概念が得られるかを探る「転回」的アプローチを提起する。ここではホルブラードによるアフリカ系キューバの占いに用いられる粉の議論に絞り、その方向性を確認する。

この占いでは占いに用いられる粉と、粉があらわす神的な力が同じ語で呼ばれ、実際に占い師にとって粉と神的な力は不可分であるという。だがなぜ、いかにも力と縁遠いような、粉という物質が力を示すのか。それは粉が自在に動くためであるというのが、占い師による説明から粉自体へと分析の焦点をずらすことで、ホルブラードが出した結論である。粉は占い師の指の動きに従って自在に動き、特定の印をあらわす。神性はこの印によってあらわされるが、それは粉の動きによってもたらされることから、神性は動きに結びついていると考えられる。この動的な神性概念は、神がいかにして超越から内在に至るかという問いに、ひとつの可能な答えを与える。神性を静的実質ではなく動的状態ととらえれば、超越は神が遠くに、内在は近くにいる状態、超越から内在への移行は神との接近として再概念化されるのである(220-7)。

つづいて6章では、神的経験による個人の変容を題材に、関係の概念が再検討される。著者らが「転回」の源流に位置づけるワグナーとストラザーンの研究は、「新メラネシア民族誌」と総称される流れを生み出してきた(114-5)。そこではメラネシアにみられる関係主義、つまり人間を諸関係の産物とする考え方が、西洋流の独立独歩の個人とは異なる人間観として注目されてきた⁽³⁾。

この支配的なメラネシアの関係主義論に対し、非関係的な個人主義に基礎づけられたキリスト教への帰依という事例は、まったく異なる思考様式の対立のなかでどのような人間観・社会観がうまれるのかという問いを喚起してきた(246-53)。著者らはこの問いにゆるやかに結びつけられる形で、ピーダーセンによるモンゴルの事例を通し、帰依によって「関係」という概念自体が変わりうる可能性を示唆する。ここでは帰依した一人の女性の語りをもとに、片方の基準に一義的に規定されるのではなく、帰依を通して関係を経験しなおす個人の姿が描かれる。彼女において外界との関係が神との内的な関係を下地にとら

⁽³⁾より詳しくは中空・田口(2016)等を参照。

えなおされ、外的関係を下地とした考え方から内的関係を下地とした考え方へと、地と図が入れ替わっていった様子が描かれる (259)。

著者らはこうした転換の経験を、突き詰めればなにを「関係」としなにを「個人」とするかの観念自体を変え、「自己関係的な個人」といったあらたな概念を生み出しうるものにとらえる (261)。ここではキリスト教への帰依という、関係主義に相容れない極限的事例と突き合わせる実験によって、存在論的人类学において彫琢されてきた関係の概念を再検討し、記述のために鍛えなおす「転回」的試みがなされているのである。

3 論評——開かれた知のために

本書は人類学思想のなかに自らの考える「転回」を丁寧に位置づけ、明快な見取り図を提示している。加えて今後の研究を刺激しうる独自の実験的議論は、著者らの「転回」論をより説得的で魅力あるものにしてしている。記述の方法論として提示される「転回」論は、フィールドに身を置きながら自前の概念をつくりなおす実践の徹底を求める点で、多くの人類学者に訴えかけうるだろう。

だが本書とは異なる角度から「転回」を検討するならば、著者らが提示するのとはまったく別の、もうひとつの人類学知の連続性がみえてくる。ゾエ・トッドによる痛烈な「転回」批判は、この論点を探る糸口を与えてくれる。メティス (Métis) の一員でありイヌヴィアルイト (Inuvialuit) の民族誌を書いてきたトッドは、先住民フェミニストの立ち位置から、「転回」が植民地主義的言説構造の内にあると指摘する。たとえばブリュノ・ラトゥールが「ガイア」について講演するとき、なぜ類似の生態論や世界観を提示してきた先住民の知は顧みられない一方で、昔のスコットランドの思想家が長々と論じられるのか (Todd 2016: 7)。なぜ半世紀以上前のアニシナーベグ (Anishinaabeg) の民族誌が参照され、現代のアニシナーベグの著述は参照されないのか (Todd 2016: 13) (4)。

彼女はどのように問いかけ、先住民が知の主体として認知されない構造が維持されていることを問題化した。キャスパー・ジェンセンが示唆するように、トッドの議論にはたしかに「転回」を過度に一般化している面があるかもしれない (Jensen 2017: 531)。しかしジェンセンは、それが人類学知の産出と流通の場自体を問題化する、学知の制度的批判であることの意味を軽んじている (5)。トッドの批判は個々の人類学者ではなく、学問界として

(4) こうした引用の政治性の問題については、Ahmed (2013) 等を参照。

(5) ジェンセンが描くトッド論の像は恣意的に歪曲されている。彼は「トッド自身の分析は西洋批判理論にしっかりと根ざしており、先住民思想にはほとんどふれていない」(Jensen 2017: 531 note 5) と注

の人類学全体を相手どったものである。それは、先住民自身が発信してきた思想がまるで顧みられない言論状況に端的にみてとれるような、だれのどのような発話を「知」「思想」と認め流通させるか、その決定が人類学者にゆだねられる非対称な知の構造を問うたのである。

こうした批判をふまえて本書をふりかえれば、そこには人類学知を制度的側面からみる視点が、決定的に欠けていることがわかる。著者らは人類学知の再帰性を徹底する運動として「転回」を特徴づけるが、その再帰性はフィールドと民族誌記述のあいだにしかなく、人類学の営為は一貫して個としての人類学者を中心にとらえられている（10, 20, 70, 142）。だが、民族誌は書かれれば終わりではない。それは発表され、読まれ、流通し、ときには集合的に学派や運動をつくっていく。そしてこの過程は、専門分化され制度化された学問界の内で生じる。本書には、こうした制度的な知識生産過程への感受性がみられない。

この感受性の欠如は、再帰的転回と呼ばれる、1980年代後半の人類学における自己批判運動の受容にもあらわれている。論集 *Writing Culture*（1986年）に代表される再帰的転回の受容においては、フィールドの現実を客観的に表象＝再現するという近代科学的な民族誌イメージの批判を中心として、フィールドと民族誌記述の関係性に論点が集約されがちである。再帰的転回を「表象の危機」と等置する著者らの受容も、この線上にある（11, 20, 141-2, 285）。だがこの時期の自己批判論をより広く見渡せば、単身の人類学者による民族誌記述だけでなく、人類学知の制度的生産という側面も議論の俎上に上がっていたことがわかる。たとえば、*Writing Culture* をはじめとするテキスト論中心の議論の相対化を試みたりチャード・フォックスは、人類学の知識生産は個々のフィールドワーカーの「職人」技によってだけでなく、より広い「工場」においてなされるのだと論じた。

学問界のなかで専門化されてからこのかた、人類学の生産は民族誌づくりの技を通してだけでなく、「工場」のような条件下でおこなわれてきた。それはたとえば大学の学部、専門家の会合で、学術会議のあいだに、図書館においてである。（Fox 1991: 9）

トッドの批判が突いたのは、この人類学工場を支配する集合的な論理やハビトゥスなのである。だれがどういった条件で製品をつくり、どのような製品が売れ、世に出回るのか。再帰的転回が民族誌のテキスト論を中心に受容される過程では、民族誌を書く職人ばかり

釈し、トッドの議論と立場性の不一致を示唆する。彼にはトッド論文におけるジグムント・バウマンからの引用ばかりが記憶に焼き付き、サラ・ハントやヴァネッサ・ワッツといった先住民の論者からの引用や、イヌイト（Inuit）のシラ（Sila）概念にかんする議論は印象に残らなかったのかもしれない。

に照準が合わせられ、人類学という工場は議論の射程から外れていった。再帰的転回に垣間見えた人類学知の制度的反省は、この転回の批判的乗り越えを標榜する本書のあらたな「転回」においては、もはや忘れ去られている⁽⁶⁾。

民族誌記述を洗練させることは人類学の中心的課題であり、本書の「転回」論はその課題を追究する真摯な取り組みである。だがあらゆる記述は、だれかに読まれてはじめて社会的生命を得る。そして人類学者が制度化された学問界で仕事をする以上、かれの記述が広い読者へと届くまでには、界のなかで認知され、売り出されていくという制度的過程を経なければならない。この過程を支配する排他的力学の反省を欠いたままでは、本書の「転回」もまた、人類学の狭いサークルで消費される知に終わってしまうかもしれない。

参考文献

- Ahmed, Sara, 2013, "Making Feminist Points," (Retrieved November 23, 2019, <https://feministkilljoys.com/2013/09/11/making-feminist-points/>).
- Fox, Richard G., 1991, "Introduction: Working in the Present," Richard G. Fox ed., *Recapturing Anthropology: Working in the Present*, Santa Fe, New Mexico: School of American Research Press, 1-16.
- Jensen, Casper, 2017, "New Ontologies? Reflections on Some Recent 'Turns' in STS, Anthropology and Philosophy," *Social Anthropology*, 25 (4): 525-45.
- 中空萌・田口陽子, 2016, 「人類学における『分人』概念の展開——比較の様式と概念生成の過程をめぐって」『文化人類学』81 (1): 80-92.
- Strathern, Marilyn, 1987, "Out of Context: The Persuasive Fictions of Anthropology," *Current Anthropology*, 28 (3): 251-81.
- Todd, Zoe, 2016, "An Indigenous Feminist's Take on the Ontological Turn: 'Ontology' Is Just Another Word for Colonialism," *Journal of Historical Sociology*, 29 (1): 4-22.

付記

選書から脱稿に至るまで議論に応じてくれた中村昇平さんに感謝いたします。

(すずき たけお・博士後期課程)

⁽⁶⁾ 民族誌記述の側面に絞っても、本書における再帰的転回観は狭隘である。この自己批判運動の背後には、「書かれる対象」であった人々自身が同時代における民族誌の読者・著者となることで、従来の書き手－読み手関係がゆるがされていく社会歴史的動態があった。ストラザーンはこうした動態を意識していたが、本書で再構成される彼女の再帰的転回論においてこの点は抜け落ちている (141-2, Strathern 1987: 269)。